



3. ヘルスコミュニケーションウィーク 2022 名古屋 第1回日本医療通訳学会学術集会報告

木内貴弘

同大会長、東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学分野

第1回日本医療通訳学会学術集会では、ヘルスコミュニケーションウィーク 2022 名古屋の枠内でシンポジウムの開催と一般演題の発表を行いました。シンポジウムのテーマは、第1回ということで医療通訳のおかれた状況をご理解いただけるように幅広く、「医療通訳の現状と今後のありかた」としました。演者は、最初ということもあって、運営委員の中から、医療通訳側（患者と医療者に中立）、患者側、医療者側の3つの立場の研究者を1名ずつ選任しました。服部しのぶ先生が、医療通訳の立場から、「通訳者としての医療通訳者」、濱井妙子先生が、外国人支援者の立場から、「外国人支援者としての医療通訳者」、押味貴之先生が医療者の立場から「医療者としての医療通訳者」という演題の講演を行いました。座長については、同様に、医療通訳の立場から川内規会先生、外国人支援者の立場から吉富志津代先生、医療者の立場から南谷かおり先生にお願いしました。

別会場では、会員の多い日本ヘルスコミュニケーション学会のシンポジウムが行われており、はたして人が来るかどうか心配でしたが、医療通訳を専門としない研究者を含む多数の参加を得ることができました。また会場からは様々な質問、コメントがあり、非常に盛会でした。

服部先生の講演では、医療通訳の定義、医療通訳団体、雇用形態、養成形態、質の保証についての現状をお話しいただいた後に、現場での医療通訳の課題についてお話いただきました。まずチーム医療の一員としては見てはもらえず、ワクチンの早期接種やN95マスクの着用等、医療者並みの感染予防策が受けられないこと、患者との連絡や院外薬局への同行等、医療通訳者の役割と業務の範囲、そして、患者情報の守秘義務をいかに守るか等の課題をお話いただきました。

濱井先生には、外国人支援のために専門の訓練を受けた医療通訳者が必要な一方で、現実にはほとんどのケースで患者が連れてきたアドホックな通訳者が対応している現状を報告いただきました。医療通訳の行動規範では、忠実な通訳と中立的な立場が強調されていますが、外国人支援の立場からは、時に逸脱した方が望ましい場合もあるのではないかと指摘をされました。

押味先生からは、厚労省が定めた「医療通訳育成カリキュラム基準」と医療者が中心となって運営している「国際臨床医学会（ICM）認定医療通訳士®」制度における「医療通訳試験合格者認定」と「実務者認定」の紹介を頂きました。将来医療通訳が診療報酬の対象となれば、医療通訳者の待遇改善と安全な外国人医療の実現が期待されますが、その実現のためには医療通訳者自身に「医療・言語・通訳の研鑽を続けること」、「通訳業務以外にも医療者としての自覚を持って外国人受入業務を引き受けること」、「どう伝えたかよりもどう伝わったかを重視して対話を成立させる責任を持つこと」の3つの要素が求められていると強調されていました。

一般演題に関しては、口演2題、ポスター3題の合計5題の発表がありました。特に順天堂大学のヘルスコミュニケーションコース関係者からは、3題の発表をいただきました。第1回目としては、まずまずだったと考えています。今後の発展に期待します。